

女優の川島なお美さんが2015年9月、54歳で亡くなり、1年半が過ぎました。胆管がんに侵されながら、亡くなる1週間前まで舞台上に立ち、女優であり続けようとした川島さん。夫でパティシエの鎧塚俊彦さんは、妻の決断を尊重し、闘病を支えました。

がん余命1年

14年7月、女房のがんが再発し、余命1年と宣告されました。余命宣告を受けたのは僕だけです。必死で生きようとする女房は、あえて医師に尋ねようとはしませんでした。

人間は、明日もあさっても、来年も再来年もやって来ると思いがちです。でもその日から僕は、一緒に過ごす一つ一つのことを大切にしようとして、深刻な顔をせず明るく接するようになりました。女房も僕と同じように過ごしていました。それはとても幸せなことでした。

がんが見つかったのは13年8月。当初、川島さんは手術を拒み、代替療法を模索していた。しかし、がんは消えず、14年1月に腹腔鏡手術を受けた。再発はその約5か月後だった。

つきあい始めたころ、「僕はパティシエだけど不器用なんだ」という話をしたら、「私もよ」と言っていました。生まれながらの女優ではなく、女優になりたかった人なんです。不器用で、ずっと憧れに向かって生き抜いてきた。だから、体にメスを入れるのをためらったのだと思います。見た目だけでなく、ミュージカルの発声に悪影響が出るのも心配だったようです。がんの再発後は副作用を

● 鎧塚俊彦さんの

ケアノート

女優のこだわり 尊重

川島なお美さんをみとって



よろいつか・としひこ 1965年、京都府生まれ。スイスやフランス、ベルギーなどで8年間パティシエの修業を積む。2009年に川島さんと結婚。東京・京橋や六本木などにスイーツの店を展開。神奈川県小田原市に農園を併設したレストランを開くなど、農業の活性化にも尽力している。

「女房は幸せだったと信じていないと、残された人間は生きていけない。近くにいた僕がぶれたら女房にも失礼です」(東京都千代田区で) —高橋美帆撮影

め、免疫療法などを取り入れながら舞台上に立ち続けました。病状について、自ら進んで公にすることもありませんでした。

こうした対応にお叱りもあるでしょう。夫として最善を尽くせたのか、という心の葛藤はあります。しかし、最終的には本人が決断したことです。自分なりの幸せの尺度を持って、しっかりと病氣と向き合った女房を心から尊敬しています。

抗がん剤治療を選ばなかった川島さんは、肝臓で処理しきれない水が腹にたまる「腹水」を抜く治療を受けながら、舞台上に立ち続けた。しかし、再発から1年余り。15年9月の長野県での公演後に倒れ、入院した。9月

僕の目を見て

翌日の9月24日、僕はベッドの横で付き添っていました。それまでも付き添ってきたのですが、この日は手をずっと握っていました。

「きょうは徹夜だな、長い夜になるね……」心の中でそんなことを語りかけていると、看護師さんが走り込んできました。「危険な状態です」って。



闘病中の川島さん(右)と鎧塚さん(2014年1月撮影)

は、看護師の詰め所にあつたようです。厳しい状況が続く中、急に女房が手をグッと握り締め、上体をワッと起こしました。びっくりしました。そして、しっかりと目を見て、ハッと息を吐きました。

その後、ガクツとなりましたが、「がんばれよ」「死んだらだめだよ」と呼びかけたら、またフツと息を吐きました。もう少しすると、もう一度、息を吐いてくれました。

お互いに相手を驚かせて喜ばせることが大好きで、誕生日などにサプライズパーティーをよくしていました。僕の誕生日は10月。女房が亡くなったのは9月だったので、最後の年は、「こんな体調だからごめんね」と言われていました。とこ

病床からの愛

おしどりの夫婦として知られた2人。お互いを思いやる気持ちは、最後まで途切れることがなかった。

電話をかけ、僕の誕生会の段取りをしてくれていたのです。知ったのは、女房の死後でした。僕の誕生会は彼女の遺志通りに開かれ、友人らが女房から預かったプレゼントを渡してくれました。腕時計でした。生前常々、「時計を贈ると別れるシンクスがあるから、あなたには絶対渡さない」と

気持ちを込めたのでしょうか。担当医は、「舞台が命を縮めたのではない。舞台があったからこそまでががんばれたと言ってくれました。救われた思いがしました。女房が女優にこだわって生き抜いたことは、僕なりに世に伝え続けたいと考えているんです。」(聞き手・志磨力)

取材を終えて 1時間余りの取材中、鎧塚さんの表情はずっとつらそうだった。舞台にこだわる川島さんに降板、休養を勧める一方、最終的に本人の意向を尊重した。当時の苦渋を思い起こし、かけがえのない人を失った悲しみを改めてかみしめていたのだろう。その痛みを思うと、胸が詰まった。鎧塚さんが運営する農園をもっと花やハーブが咲き誇るようにすることが、川島さんの遺志の一つだという。ぜひ実現させてほしい。

「ケアノート」は毎月第2日曜日に掲載します。ご意見、ご感想は、〒100・8055読売新聞東京本社生活部へ。ファクスは03・3217・9919。電子メールはkurashi@yomiuri.com

くらし 家庭